

## 三井高寔氏(三井分家)との対談

安 岡 重 明

- I はしがき
- II 対談の趣旨
- III 分家の創設
- IV 親類のつきあい
- V 子弟の教育
- VI 一族のあつまり

### I はしがき

わたくしたちは、三井家研究の一環として三井総本家・本家・連家の方々からお話しをうかがい、三井家の制度の実際について記録を集めてきた。今回、甲南大学経営学部教授三島康雄氏の御紹介により三井5本家のひとつ新町家(当主三井高<sup>なる</sup>逐氏)の分家三井高<sup>たかただ</sup>寔氏のお話しを承ることができた。対談は1979年4月28日午後2時から同4時ごろまで神戸市灘区城の下通2丁目4-14の同氏宅にて行われた。同席者は高寔夫人鶴子氏、御令息高<sup>たかゆき</sup>敬氏(甲南大学教授)、三島康雄氏、千本<sup>ちもと</sup>暁子氏(同志社大学大学院商学研究科学生)であった。この機会を与えてくださった三井高寔氏、同高敬氏、三島康雄氏にお礼申しあげる。なお現在までに私たちが行った対談の記録は次のとおりである。

1. 「敗戦後の三井家同族会—三井八郎右衛門高公氏を訪ねて—」『同志社商学』第30巻第1号、1978年。

2. 「三井家同族の婚姻と相統一三井禮子氏との対談―」『同志社商学』第30巻第5・6合併号，1979年。
3. 「三井高逯氏との対談」『同志社商学』第31巻第4号，1979年。
4. 「三井高昶氏との対談」同志社大学人文科学研究所編ならびに刊『社会科学』第26号，1979年。

## II 対談の趣旨

安岡 三井さんの昔の話を聞かせていただきたいと思ひまして、今まで、八郎右衛門高公さん、禮子さん、高昶さん、高逯さんにお話をうけたまわりました。今回は、三島先生が三井さんの御一族の方がおられるのでお話を聞かせていただけるようにしましょうか、と言ってくださいましたので、ぜひにとお願いしたわけです。

私は江戸時代の初めから調べさせていただいております、宗竺遺書とか三井家憲など大事なところは拝見させていただいております。

三井（敬称略） 三井文庫にあるのは一部焼けたのではございませんか。

安岡 それはうけたまわっておりません。

三井 三井文庫は元は戸越銀座にあったのですが、戦災で一部焼けたのではないですか。今は上高田にありますね。相当、そこには残っているはずですよ。

安岡 そうですよ。でも、我々は書庫の中へは入れません。評議員等をなさっている方は入れます。ですから、目録を見て借出します。しかし、新しい分はあまり整理されておられません。また、三井の家関係の記録をお預けになっている場合もありますが、そのお家の御了解を得なければ見せていただけません。江戸時代のものは記録に頼らねばなりません、明治時代以後の状態の御記憶のことを記録にとどめさせていただきたいと思ひま

す。

三井さんの家は制度的にみましても一番きちんと規則が決まっています。我々としましては、このような厳重な規則がそのまま守られていたとするならば、御家族の方は大変だっただろうと思います。そこで、実際の運用はどうだったのかということを受けたまわりたいのです。

### Ⅲ 分家の創設

三井 私が高逐の弟ですので分家しました。三井の同族は11軒でそれ以上増やせません。

安岡 分家になるときの条件とかルールはありますか。

三井 あります。財産はどれくらいかという規定がありました。

安岡 分家の条件は家憲にも書いてありますが、それとは別にそれぞれの家庭においても多少の方針はあったのですか。財産状況も異なりますし。

三井 そうです。親父が株券等を私の名義にしておいてくれたのを規定の額以上にもらいました。各家庭それぞれ多少は違うと思います。

安岡 同族会が決めた額プラスいくらか、ですね。

三井 後は一切独立会計です。そして、仕事は、初めから何をしてきかまいません。

安岡 三井さんの系統の会社に勤めることもよろしいのでしょうか、こういうところへ入ったらどうかというようなお話はどうでしたか。

三井 それは自分の望みでやります。

安岡 希望すれば、そういう会社へ入れてもらえるのですか。

三井 だいたい三井の会社へ入ります。ほかに自分がやりたいことがあればそれをすればいいんです。三井高義<sup>たかよし</sup>は、今は三井同族のうちの1軒の当主になっておりますが、今の芸大の前身の美術学校へ行き彫刻科を卒業

し主に馬の彫刻で各種の賞をもらい、今は日展の彫刻科の審査員をやっていると思います。

安岡 防衛大学の先生をやっておられる方もいらっしゃいますね。

三井 お医者もおります。私の専門は造船の方です。昔から船が好きだったものですから。当時、三井物産に造船部がありましたので、そこへ入り、設計にずっとおりました。

安岡 それからずっと技術者としてお勤めですか。

三井 そうです。

安岡 三井さんの御一族だから社長にしようか、というようなことは。

三井 全然ありません。

安岡 その方がよろしいかもしれませんね。特別扱いされるよりは。

三井 ええ、全く皆さんと同じ待遇でした。

安岡 三井物産造船部が独立の企業になった時、株の関係はどうになりましたか。

三井 全く関係なく、フリーの立場です。

安岡 立ち入ったことをお話しますが、三井禮子さんに伺いますと、分家に分与する財産は決まっているけれども、総領と比べるとだいぶ違うということていろいろ要求が出るということでした。

三井 東京ではありましたようです。

安岡 個別に起ったのですか。それとも分家方一同としてですか。

三井 私はずっとこちらにおりますのでね。昭和4年に岡山におり、昭和8年に神戸に来てずっとそのままです。ですから、こちらにいる時に東京でなにかあったという噂がありました。

安岡 三井禮子さんは、非常に進歩的な方ですので、私はいくらもらいましたというようなことをおっしゃっていました。

三井 あの人は嫁に行ったのですからね。連家の高篤のところへ行きまし

たが、今は離婚しました。

安岡 歴史をやっておられますので、そういうところから知り合いになり、いろいろ御紹介していただいております。

三井 <sup>たかほる</sup>高陽というのは慶応を出て交通史をやっております。ドイツにも行きました。

安岡 ドイツに行かれるとき、経済史ならいいが交通史なので同族会からお金が出なかったということを伺っております。

三井 そうですか。当主でしたから、いろいろ制約がございましたのしょう。私の兄高逐は東京大学の理学部で植物と、大学院で動物の両方をやっておりました。にわとりの研究をしていたのですが、父が隠居して当主になる前から推定家督相続人になっていたので、三井の関係の会社に入らねばならなかったようです。

安岡 高逐さんの履歴書は、同族会からいただいております。この間は、履歴書を拝見しながら、相続のときはどうでしたか、お勤めになったときの条件はどうでしたかということなど、いろいろお聞きしました。ずいぶんと気さくな方の方ですね。家憲の規定が細かいので御不自由でしょうとお聞きしますと、何も不自由は感じません、ふつうの人間ですよ、面倒なことがあるわけではないと、おっしゃっていました。禮子さんのように桎梏に感じて家に対して反発される方もいらっしゃいますし。

家憲には、ずいぶん詳しく制裁規定とか、教育の仕方とか、ルール違反をしたものに対する罰則が定められていますが、違反した人はどうなりますかということをよく伺うのですが、そのような例はないということなんですね。ただ、結婚に関しては了解が得られなかったから、戦後入籍されたという方がおられますね。三井さんの御一統11軒は非常に結束が固いので、分家方もいろんな会をつくって交際なさっているのかと思っておりますが、そういうことはなかったのでしょうか。

三井 ありませんね。それに私は関西におりますのでね。

#### IV 親類のつきあい

安岡 関西におられる方はいらっしゃいますか。

三井 いいえ、私ひとりです。分家はほとんど東京です。

安岡 お勤めで岡山に来られたのですか。

三井 そうです。それに、昔からずっと船が好きだったので、東京より神戸に住みたいと思っていました。

安岡 高寔さんは御本家筋の御次男ですか。

三井 ええ。戸籍上は三男です。一番上の兄が一つのとくに亡くなりました。ですから、私と兄（高逐）と妹（敏子）の三人兄妹です。全部で6人いたのですが、あとは小さいときに亡くなりました。

安岡 お子様の時に、総領と比べて育て方などは違いましたか。

三井 それは昔からのしきたりで、そう厳しくはないですが、兄の方をたてていました。

安岡 普通の家でも、戦前までは、長男をたてていましたからね。

安岡 高寔さんの御結婚の時には、同族の中で相手方の幹旋などをなさる方がおられたのでしょうか。

三井 私の場合は7、8年前に亡くなりました<sup>たかのみ</sup>高大という私の家内（鶴子）のいここです。彼が私の母方のいここにこういうのがいるからということ  
で話が進みました。

安岡 奥様も三井家の何かの関係ですか。

三井 いいえ。家内は徳大寺家<sup>とくだいじ</sup>です。明治天皇の侍従長をしていた徳大寺  
実則<sup>つねなる</sup>の三男<sup>つねなる</sup>則麿の長女です。三井家と徳大寺家はもともと親類関係でし  
た（三井高大<sup>たかのみ</sup>の母泰子は徳大寺則麿の姉）。

## V 子弟の教育

安岡 学校の選択などは、お父様がだいたいお決めになるのでしょうか。

三井 小さい間はわかりませんので両親の言うとおりにしますが、大学での専門などは好みで決めます。私の父は好きなことをやれと申しましたので、兄は植物をやり私は造船をやりました。

京都御所にあった常盤殿が明治の中頃、小学校に払下げられたのですが、私の祖父がもったいないといって日露戦争後譲り受けました。それを京都の新町通六角にもってきて建てていたのですが、戦後、土地を処分した時に、一部を東京へ持っていき、残りを八坂神社に移し、現在結婚式場になっています。

安岡 三井家の御一族ということになりますと、社会的にもいろいろ注目されるでしょうし、御子息に教育される時、特別の御配慮はございませうね。

三井 三井家には清泉学寮<sup>せうせんがく</sup>といって三井家の息子を入れる寮がございました。麻布<sup>まふ</sup>の<sup>ちうがい</sup>筭町にありました。私も学習院の寮に入っておりまして、その後しばらく入りました。大正4年頃に新しく清泉学寮ができ、その前は時習舎というのがありました。それは、いつまで入っていてもよく、大学生になってもいいんです。

安岡 行儀・しつけが厳しかったのですか。

三井 いいえ。同族の子弟の他に、大学の優秀な方が2、3人入っておられました。全部で14、5人です。高利も入っておりました。寮長は第二高等学校の哲学教授で杉谷泰山<sup>たいざん</sup>先生で、三井の教育顧問ということで寮長をしていました。その他に、英語・数学・体育の先生がおりました。(参考。清泉学寮、寮長 杉谷泰山先生、英語 木村雄山先生、数学 山田堅三郎先生、体育

岡田孝太郎先生。) 何時から何時まで自習の時間、運動の時間というように決っていました。

安岡 そういう風に、小さい時から御一緒に生活なさいますと、御一族の間での意志の疎通ができますね。

三井 そうですね。それに私は学習院は、全寮制度でしたので、小学校の時から学習院の寮にも入っていました。初等科の時の院長が乃木大将でした。私よりずっと上には、近衛文麿さん、木戸幸一さんが入っておられました。

安岡 学習院の高等科は、旧制の高等学校と同等の扱いをうけていましたね。

三井 途中からになりました。それ以前は文科方面は、東大・京大などには無試験で入れましたが、理科系は受験資格がありませんでした。それで中等科を出て、一高とか三高に入りました。私の兄の時からは入れるようになりました。つまり、試験を受ける資格ができたのです。大正の初期ぐらいからでしょうか。

安岡 三井さんの家憲を、他の大商家のものと比べますと、江戸時代から教育つまり子弟の訓練について非常に熱心であるように思います。顧問の井上公爵もそうでしたね。なぜなのだろうかと思うのですが、何かお気づきの点はございませんか。

三井 いろいろ書いたものを見ておりますと、小さい時から、きちんと教育していたようですね。

安岡 初代から三代目ぐらいまで、相当きびしく実務できたえられておられたようですね。その後、18世紀の後半期には絵画とか浄瑠璃を書かれる文人が出ておられますね。その頃になると、訓練の方もゆるくなってきたのかと想像しているのですが。

三井 そうかもしれませんね。本居宣長の弟子も三井高<sup>たかかげ</sup>蔭ですし、戯曲を



書いた人もおります。

三井では、逆算の暦が毎年出されておりました(年表を示す)。これを見ると今から何年前というのが一目でわかります。

三島 これは、三井の御一族にだけ配られたのでしょうか。

三井 そうです。

安岡 御一族で何軒というようなことは、概数としておつかみになっておられませんか。三井何十家族とか何百家族いわれていませんか。

三井 三井11軒が基礎になっており、それに分家が少しずつついていきます。昔は、分家する時、苗字を変えました。「泉」とか「井原」<sup>いづみ</sup>、「長田」<sup>いはら</sup>とか。養子に行ったのもおります。八郎右衛門高公の弟の高維<sup>おさだ</sup>が大正の末に分家するとき、名前を変えるのは法律上まかりならぬということになりました。

安岡 昔に苗字を変えて分家された方は、つきあいが薄れますとわからなくなりますね。

三井 今は分家しましても、皆、三井と名乗ります。

安岡 「高」をおつけになるのですか。

三井 それは昔からですのでね。佐々木家から養子にまいりました三井高久<sup>ひさ</sup>からです。三井備中守でして、佐々木六郎高久といっていました。創業者三井高利よりずっと前です。松坂に来たのは三井高俊で織田信長に滅ぼされてからです。

三島 現在、三井の御一族で「高」をつけていらっしゃらない方もおられますか。

三井 おります。半々ぐらいです。

## VI 一族のあつまり

安岡 今では、御一族一堂に会すということはやっておられませんか。

三井 東京では正月にやっております。

安岡 このあいだ三井禮子さんにお手紙いただいたのですが、「八郎右衛門さんの兄弟80才以上の方何人、70才以上の方何人かが寄りました、お正月は忙しい」というようなことを書いておられました。

私どもは、三井家はきちっとした組織をつくっておられましたので、分家間でも同じようなものを作っておられるかと思ひまして。

三井 昔は東京で、やっておりました。11家の同族及び分家とそれ以外にもだいたい部長以上の会社の役員も一緒に寄りまして、正月に三田綱町にありますが三井集会所（現三井クラブ）でありました。

安岡 今はもうないように聞いております。少し前までは、直系会社から社名に「三井」を使用する商号料というのが入っております、それを11軒でお分けになっていたそうです。期限がありましてね、去年で終わったのでしょうかね。今は、暮にちょっとした晩さん会によばれるとか、景気が悪くてできないときには品物を送ってくる程度だと聞いております。

三井 私は、川崎正蔵のことを調べているのですが、その四代目が川崎重工におられます。戦後の財産税で川崎財閥は壊滅したらしいのですが、三井家は財産税の打撃というのはどの程度だったのでしょうか。

三井 同族は9割位とられたとか聞いております。

三井 そうですと、昭和25年頃を境にして、豪華な生活はほとんどできなくなったのですね。

安岡 ロバーツの『三井』（安藤良雄・三井禮子訳）には、総領家は91%とられたと書いてありますね。

三井 私のところは率はずっとひくうございましたが株券等を処分して財産税にあてました。

安岡 役職を退かれ、株もとりあげられましたからね。江戸英雄さんの書いたものなどを拝見しますと、三井一族の方の生活をなんとかしなければいけないということで、三井不動産の株は、金持ちの人に預けるようにして買ってもらったという例があります。とり返すのにまた、随分苦勞をしたそうですが。住友さんも岩崎さんもそうした工夫をされたのですね。

三島 三井高敬さんは、戦前の結束が固い時のことを、子供心になにか思い出があるのではありませんか。

高敬 昭和8年に神戸の方に来ておりましたのでね。

三島 三井さんの御一族が神戸にいらっしゃるとは思いませんでした。他にもどなたかいらっしゃいますか。

鶴子夫人 高公の弟の高維が、芦屋におりました。

三井 50年ほど前のことですね。正金銀行だったと思います。そこに勤めておりましたね。

高公の次男高実は今現在、三井航空エアーラインにおられます。私は、昭和5年から8年まで三井物産造船部の玉野工場におりました。昭和8年から神戸に参りまして造船部と三井物産の船舶部（現大阪商船三井船舶）の仕事、主に船の基本設計をやっておりました。昭和17年の11月より20年の11月までに三井造船の役員になりまして、終戦時は昭和25年より藤永田造船所（現三井造船 藤永田工場）の囑託として造船設計を手伝っておりました。

今は社友ということになっています。おとどしの秋に、三井造船がそういう制度をつくりました。もと役員だったのを社友ということにしました。ごくわずかな人数ですけど。

安岡 こちらにおられますと、三井の御一族とは疎遠になられますね。し

かし冠婚葬祭のときには、関係の深い方の場合には東京まで行かねばならないということがあるかと思いますが、どういう基準で、行く行かないを決めるのですか。

三井 兄弟とおじ、おば、いとこといった程度です。法事は京都でありますので、その時は、我々皆で行きます。

安岡 法事というのは、総領家の法事ですか。

三井 総領家の法事は特別の場合のほかは兄がいきますので、我々はいきません。新町家の法事にいきます。

安岡 私は社会学的なことにも興味をもっているものですから、前に東京の高公さんのところで、葬式の時の焼香順の記録をいただいてきました。現在の八郎右衛門さんの奥様<sup>とし</sup>銀子さんのお葬式の時のものです。このようなものはございせんか。

三井 私のところにはございせん。三井の同族会が保存しております。

安岡 高敬さんは昭和6年のお生まれですので、敗戦まで十数年ございしますが、三井の御一族として成長されまして、御不自由などなかったですか。

高敬 そんなこと全然ありません。ですから、どんな規則があるのかも知りませんし。

安岡 私どもは、私ぐらいの年配の方が、そういう制度の中でお過しになって、どのように感じていらっしゃるのかということに大変興味もっております。ですから、50才ぐらいの方にお会いしたいとお願いしているのです。三井銀行の支店長をなさっている方で50才ぐらいの人がいらっしゃるそうですね。

三井 おります。<sup>ひさしげ</sup>長生でしょう。

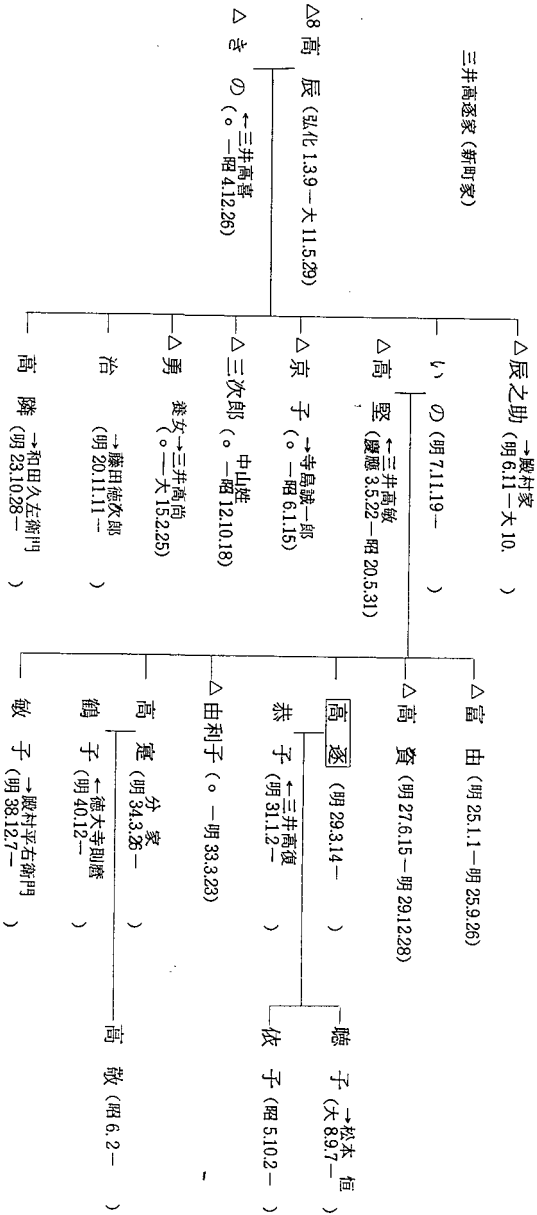
安岡 何人かに会いまして感じましたことは、思ったより自由に生活なさっているようですね。三井禮子さんは桎梏だと感じていらっしゃる

ようですが。各家との御交際の仕方などもお伺いしたかったのですが、こちらに1軒だけですとそうひんぱんに往き来しておられませんでしょうかね。

貴重なお話しをどうも有難うございました。

〔付記〕 先般発表した安岡重明「三井高逯氏との対談」(『同志社商学』第31巻第4号, 1979年)において, 高逯氏のお名前を高逯氏と誤記しました。失礼の段心からおわびして, 訂正させていただきます。

三井高寛氏（三井分家）との対比



〔備考〕

矢印は養家先または婿家先、実家を示す。

△印は物故者。( )内に生没年月日。

1947年3月13日現在の調査。

持株会社 監理委員会編 『日本財閥とその解体』 付図より